

イベントレポート 『2011 K耐久東海シリーズ 第3戦』

開催日 2011年7月17日(日)

9:30 決勝スタート 13:25 チェッカー

天候 晴れ

最高気温 32.8 (12時)

場所 スパ西浦モーターパーク

参加台数 26台

夏場の電力不足に対処するため、7~9月の間は自動車メーカーならびに関連企業の多くが土日勤務、木金休みとなった。当シリーズのエントリーも少なからず影響を受け、止む無く第3戦を欠席するチームもあったが、最終的には26台のエントリーが集まった。

今回は決勝が4時間と、いつもより1時間の長丁場。梅雨明けの快晴の中、最高気温は33まで上がり、マシン・ドライバーとも文字通りの耐久戦となった。



KNNクラス(軽NAのノーマルクラス)

今回は4台のエントリーとなったこのクラス。開幕より2連勝のNo.100「HACもらいものビート」は、20Kgのハンディーウエイトを搭載しての走行。一方、2戦連続で2位となっているNo.39「ステージワンレーシングアルトV」は、トップまで僅かのところまで来ているので、今回は初優勝を狙うチャンスでもある。

また2戦連続3位のNo.444「team YKSR ALTO」も安定した速さを持っているので、ワンチャンスで上の順位に入る可能性は十分にある。

予選

予選1位となるタイムをマークしたのはNo.97「マッハ滝浪TSRトゥデイ」でタイムは1'11.153。前は5位ながらこのシリーズへの参加歴は長く、戦い方を熟知しているチームである。

予選2位にはNo.39「ステージワンレーシングアルトV」が1'13.238で入ってくる。3度目の正直となる初優勝はなるのか。

No.100「HACもらいものビート」はさすがに20Kgの影響が大きかったか、1'13.577の3位にとどまる。

4位のNo.444「team YKSR ALTO」は1'14.585ながら、No.100の次のグリッドに付け、上位入賞に望みをつなぐ。

序盤

1時間経過時点では、4チームがわずかに1Lapの中に入るという僅差での戦いとなる。

そんな中でトップは、予選1位からスタートのNo.97「マッハ滝浪TSRトゥデイ」で、45周を周回する。

続く2位から4位までは44周の同一ラップで、2位にNo.100「HACもらいものビート」、3位にNo.39「ステージワンレーシングアルトV」、4位にNo.444「team YKSR ALTO」というオーダーとなる。



中盤

2時間が経過すると、普段のレースであれば終盤に突入するところであるが、今回は決勝が4時間と長いためにまだ中間地点である。

この時点ではNo.100「HACもらいものビート」が86Lapでトップに浮上してくる。これを1Lap差でNo.39「ステージワンレーシングアルトV」が追いかける。

3位のNo.444「team YKSR ALTO」も83Lapと、優勝に望みをつなぐポジションに付ける。

序盤にトップを走行していたNo.97「マッハ滝浪TSRトゥデイ」は、80Lapでの4位と、やや水を開けられる形に。



終盤

普段はチェッカーとなる3時間が経過し、今回のレースはようやく終盤の局面を迎える。他のクラスではマシントラブルによるリタイヤが続出しているが、このクラスのマシンは全車とも健在。

そんな中No.100「HACもらいものビート」が、中盤からの1位をキープし続ける。周回数は121Lapだが義務ピットインの消化回数が他チームよりも少ないため、この後に差を詰められる可能性が。

2位にはNo.39「ステージワンレーシングアルトV」が付ける。周回は114周だが既に4回の義務ピットインを全て終えているため、ラストにトップとの差が一気に縮まるか。

以下3位に112LapのNo.444「team YKSR ALTO」、4位に108LapのNo.97「マッハ滝浪TSRトゥデイ」と続く。

最終結果

長丁場となる4時間の決勝をトップで走りきったのは、No.100「HACもらいものビート」であった。中盤以降は20Kgのウェイトハンディーの影響を感じさせない走りでも154Lapを走行し、開幕3連勝を飾った。

2位に入ったのはNo.39「ステージワンレーシングアルトV」でラップ数は152周。終始トップを視野に入れるポジションで走行したものの、優勝まではあと少し届かなかった。

3位と4位は同一の147Lapでの争いとなった。この僅差での争いを制したのは、No.444「team YKSR ALTO」で、開幕から3戦連続での表彰台をGETした。

No.97「マッハ滝浪TSRトゥデイ」は、予選1位からのスタートであったが中盤以降に上位陣に引き離されてしまった。

4位でのフィニッシュではあったが3位との差はごく僅かであり、次戦に望みをつなぐ形で今回のレースを終えた。

第4戦ではNo.100「HACもらいものビート」は40Kgのハンディーウェイトを積むことになる。開幕4連勝で一気にシリーズ優勝を確定してしまうのか、それとも他のチームが一矢報いるのか注目である。



KNCクラス(軽NAのクローズドクラス)

前回KNNクラスに参加の No.60「サーキットのじいいSPトゥデイ」と、KNOクラスに参加のNo.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」の2チームが、今回はKNCにクラスチェンジ。
これをクラス 1 位の No.25「アカミネコマル2トゥデイ」、3 位の No.10「ぼんこつRTトゥデイ」、4 位の No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」の3台が迎え撃ち、全5台での争いとなった。

予選

予選 1 位となったのは、1'09.176 をマークした No.10「ぼんこつRTトゥデイ」。開幕戦こそリタイヤしたものの、表彰台の常連チームである。

2 位はシリーズリーダーの No.25「アカミネコマル2トゥデイ」。タイムは 1'10.312 で、No.10 の 4 つ後のグリッドをキープする。
これに続くグリッドでの 3 位には、1'10.889 の No.60「サーキットのじいいSPトゥデイ」が入る。

4 位の No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」も 1'11.153 で、上位陣をピタリをマークする。

5 位の No.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」は 1'20.426 で少し離れたグリッドからのスタートなるが、新規格軽自動車ならではのピット時間短縮ハンディーを活かして、上位に絡むことができるか。

序盤

予選 1 番手からスタートした No.10「ぼんこつRTトゥデイ」であったが、スタート直後からスロー走行とマシンに異変が生じた様子。早々のピットインを余儀なくされ、序盤にして上位争いからは一歩後退してしまう。

1 時間経過時点での 1 位は No.25「アカミネコマル2トゥデイ」で 46Lap を周回する。2 位の No.60「サーキットのじいいSPトゥデイ」も同一周回に付け、トップをピタリをマークする。

3 位の No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」も 45Lap と、まだ優勝を狙える位置をキープする。

4 位の No.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」ハンディータイムを活かし、44LAP を周回。

序盤にトラブルが出た No.10「ぼんこつRTトゥデイ」は 31Lap にとどまる。

中盤

2 時間が経過すると No.25「アカミネコマル2トゥデイ」が 89Lap で頭一つリードする。

2 位の No.60「サーキットのじいいSPトゥデイ」は 87 周、3 位の No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」は 86 周、4 位の No.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」は 85 周と表彰台争いが混沌としていたが、No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」はサスペンションを破損して無念のリタイヤとなってしまふ。

No.10「ぼんこつRTトゥデイ」は 68 周で、完走して着実にポイントを獲得したいところである。



終盤

3 時間が経過した時点では、124 周をラップした No.60「サーキットのじいSPトゥデイ」が 1 位に浮上してくる。

これを No.25「アカミネコマル2トゥデイ」が 1 周差で追いかける。3 位の No.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」は 116 周で優勝を狙うには厳しい状況となるが、4 位の No.10「ぼんこつRTトゥデイ」は 102 周にとどまるため、表彰台の可能性が高まってくる。

最終結果

このクラス、1 位でチェッカーを受けたのは No.60「サーキットのじいSPトゥデイ」であった。161 周を Lap して、クラスチェンジの緒戦を勝利で飾った。

2 位には同一ラップで No.25「アカミネコマル2トゥデイ」がチェッカーを受けたが、トップにはわずかに 19 秒及ばなかった。

3 位は新規格軽自動車である No.81「パイオニア・ワコーズ・エッセ」が 151 周でゴールした。こちらも KNO クラスからクラスチェンジした緒戦を表彰台で飾った。

序盤にトラブルが発生した No.10「ぼんこつRTトゥデイ」は中盤以降は持ち直し、141 周で完走となり貴重なポイントを獲得した。

シリーズポイント争いでは No.25「アカミネコマル2トゥデイ」が圧倒的優位に立っている。しかし 2 位から 6 位までの差はほとんど無いので、4 戦目のポイントがシリーズの行方を決めることになりそうである。



KNOクラス(軽NAのオープンクラス)

今回は 5 台のエントリーとなったこのクラス。シリーズポイント争いは 2 戦連続表彰台の No.50「ベストライフトゥデイ」が 35 ポイントで一步抜け出しているが、22 ポイントで 2 位の No.23「チームミニトゥデイ」から、16 ポイントで 7 位の No.99「チームオーシャンズトゥデイ」までは団子状態となっている。

No.50 の独走に待ったをかけ、トップ争いに加わって来るチームは現れるのか。

予選

予選ベストをたたき出したのはシリーズポイントリーダーの No.50「ベストライフトゥデイ」でタイムは 1'05.820 を記録する。予選 2 位から 4 位までは大接戦となる。2 位の No.296「小山輪業トゥデイKR - O」は 1 06.540、3 位の No.99「チームオーシャンズトゥデイ」は 1 06.591、4 位の No.23「チームミニトゥデイ」は 1'06.708 と、2 位から 4 位までの差はわずかに 0.16 秒。

第 2 戦で優勝した No.69「タカタCCMCトゥデイ」はコースイン早々にスロウダウン。予選でタイムを残せず、ピットスタートとなってしまう。

序盤

1 時間が経過したところでの 1 位は No.50「ベストライフトゥデイ」。49 周を Lap し、2 位に 1 周の差をつける。

2 位から 4 位までは予選での接戦をそのままに、48 週の同一ラップでの争いとなる。オーダーこそ 2 位に No.99「チームオーシャンズトゥデイ」、3 位に No.23「チームミニトゥデイ」、4 位に No.296「小山輪業トゥデイKR - O」となるが、僅差での争いを続けている。ピットスタートの No.69「タカタCCMCトゥデイ」は 46Lap とやや遅れを取ってしまう。

中盤

2 時間経過時点でのトップは、なおも No.50「ベストライフトゥデイ」で 94 周を周回する。

2 位には No.296「小山輪業トゥデイKR - O」が再浮上し、3 位の No.23「チームミニトゥデイ」とともに 92Lap を走行。

4 位には No.99「チームオーシャンズトゥデイ」が 89 周で続き、5 位の No.69「タカタCCMCトゥデイ」は 83 周にとどまる。

終盤

3 時間が経過しても No.50「ベストライフトゥデイ」が 1 位の座を守り続ける。130Lap を周回し、総合でも 1 位争いを演じる。

2 位には 128Lap の No.23「チームミニトゥデイ」が付ける。

3 位と 4 位は 126Lap の同一周回で、No.296「小山輪業トゥデイKR - O」と No.99「チームオーシャンズトゥデイ」が表彰台を懸けた戦いを繰り広げる。

5 位の No.69「タカタCCMCトゥデイ」は 123Lap で表彰台は厳しくなってくる。



最終結果

トップでチェッカーを受けたのは、予選 1 位からスタートした No.50「ベストライフトゥデイ」であった。169Lap を走行し、KNOクラスとしては久々の総合 1 位となった。

2 位は終盤に追い上げた No.99「チームオーシャンズトゥデイ」が 168 周でチェッカーを受けた。

終始 2 位争いに絡んでいた No.23「チームミニトゥデイ」は 166Lap の 3 位で、同じく上位争いを繰り広げていた No.296「小山輪業トゥデイ KR - O」は終盤に周回数が伸びず、163Lap の 4 位でフィニッシュした。

ピットスタートを喫した No.69「タカタ CCMC トゥデイ」は序盤のロスが響き 161 週の 5 位でゴールした。

開幕戦に続き 2 度目の優勝を飾った No.50「ベストライフトゥデイ」は、シリーズポイント争いで大きく 2 位以下を引き離し、第 4 戦の結果次第では最終戦を待たずしてシリーズ優勝を決める可能性も出て来た。これに待ったをかけるチームは現れるのだろうか。



KTCクラス(軽ターボのクローズドクラス)

輪番勤務の影響で台数の減るクラスが多い中、KTCクラスはいつもとほぼ同じ6台のマシンがエントリーしたが、うち2チームは初参加という顔ぶれ。

シリーズポイント争いでは、1位のNo.392チームMRTmが32ポイントで頭一つ抜け出ている。しかし、このクラスは表彰台の顔ぶれが毎回大きく変わることを考えると、残り3戦を残した時点ではどのチームにもチャンスがあると言えるであろう。

予選

予選1番手のタイムをマークしたのはNo.21「ZEST Lubrossセルボ」で、タイムは1'09.948。前戦では2位でフィニッシュしており、今回こそは優勝に手が届くか。

予選2位は前戦優勝のNo.46「カーエナジーワークスアルト」でタイムは1'10.945をマーク。

3位のNo.112「白須賀会カプチーノ」は1'12.284、4位のNo.392「Zammersヴィヴィオ」は1'12.746と、予選上位4位までをシリーズ上位4チームが占める結果に。

以下、初参加の2チームNo.5「Civet Works アルト」が5位に、No.3「ロピタルキョウワ アルトワークス」が6位と続く。

序盤

決勝開始から25分、予選2位の好位置からスタートしたNo.46「カーエナジーワークスアルト」が突然のスローダウン。何とかピットインしたものの、駆動系のトラブルのためリタイヤとなってしまふ。

1時間が経過した時点では、予選1位からスタートのNo.21「ZEST Lubrossセルボ」が47Lapで1位のポジションをキープ。

2位には予選4位からスタートのNo.392「Zammersヴィヴィオ」がジャンプアップ。周回数は46周でトップを視野に捉えている。

3位と4位は45Lapの同一周回。3位には予選5位から順位を上げてきたNo.5「Civet Works アルト」が、4位にはNo.112「白須賀会カプチーノ」が続く。

5位のNo.3「ロピタルキョウワ アルトワークス」は42Lapと、少し水を開けられる。

中盤

2時間を過ぎたところでも、No.21「ZEST Lubrossセルボ」が1位の座を守り続ける。周回数は90周で総合でも7位に付ける好ポジション。

2位のNo.392「Zammersヴィヴィオ」はトップから1周差に付け、後半戦での逆転に望みをつなぐ。

3位は87LAPでNo.5「Civet Works アルト」が続く。初参加でいきなりの表彰台をGETすることができるか。

4位のNo.112「白須賀会カプチーノ」と、5位のNo.3「ロピタルキョウワ アルトワークス」はともに86Lap。ワンチャンスで表彰台を狙える位置に付け、レースは後半戦を迎える。



終盤

決勝が 2 時間半を迎えようかというところで、3 位を走行していた No.5「Civet Works アルト」が突然のストップ。ミッショントラブルでリタイヤとなってしまふ。

3 時間が経過した時点も、上位の 2 チームは僅差で走行を続ける。No.21「ZEST Lubrossセルボ」が 126Lap で 1 位をキープするものの、僅か 1 周差で No.392「Zammers ヴィヴィオ」がピタリと追走する。

3 位の No.112「白須賀会カプチーノ」は 117Lap にとどまるため、優勝争いは上位 2 チームに絞られる。

また 4 位の No.3「ロピタルキョウワ アルトワークス」は 113 周で、表彰台が微妙な位置での走行となる。



最終結果

トップでチェッカーを受けたのは、予選 1 位スタートから一度もトップの座を譲らなかった No.21「ZEST Lubrossセルボ」であった。163Lap を周回し、嬉しい初優勝となった。

2 位には 162Lap で No.392「Zammers ヴィヴィオ」が入った。終始トップの背中が見える位置で走行を続けたが、あと一歩届かなかった。

3 位は No.112「白須賀会カプチーノ」が 153 周で入り、開幕戦以来の表彰台を GET した。

4 位は初参加の No.3「ロピタルキョウワ アルトワークス」。4 時間を走りきったことで、今後に向けて貴重なデータが獲得できたことであろう。

今回の結果で、シリーズトップの No.392「Zammers ヴィヴィオ」がさらにポイントを伸ばす結果に。しかし 2 位の No.112「白須賀会カプチーノ」は 10 点差、3 位の No.21「ZEST Lubrossセルボ」は 12 点差と、残り 2 戦で逆転優勝に手が届く位置に付けている。

しかしこのクラスの勝者は毎回変わっていることから、今後の展開は予測が非常に難しいと言えよう。



KT0クラス(軽ターボのオープンクラス)

開幕戦では 9 台の激戦となったこのクラスだが、今回は輪番勤務の影響もあってエントリーは 6 台。

開幕から 2 連勝の No.14「ガレージイシヤマアルトバン」だが、今回は 40Kg のハンディーウエイトを搭載しての走行となり、ウエイトの影響がどう出てくるのか。

予選

予選 1 位となったのは No.14「ガレージイシヤマアルトバン」。40Kg のウエイトハンディーを感じさせない走り、オーバーオールとなる 1'05.082 を記録する。

2 番手には 1'06.001 をマークした No.666「ヴィスコンティ!MWあると」が入ってくる。ここまでシリーズ 4 位と好位置に付けており、今回もポイントを積み重ねるには良いポジションからのスタートとなる。

3 位は No.55「アビリティーガレージワークス」で、タイムは 1'06.418。前戦では 2 位と調子は上向きで、今回も上位を狙う。

4 位には No.210「ZEST Lubrossアルト」が 1'06.522 で入ってくる。上位 4 台を、シリーズ上位の 4 チームが占める結果となる。

以下 5 位に今年初参加の No.192「DXLメビウスアルトワークス」、6 位に新規格軽自動車の No.32「爆走あばれ馬レーシングミニカ」と続く。



序盤

スタートからわずか 10 分で No.210「ZEST Lubrossアルト」がピットイン。駆動系のトラブルが発生し、早々に戦列を去ってしまう。

1 時間が経過した時点でのトップは、No.14「ガレージイシヤマアルトバン」で 49 周をラップする。

2 位の No.666「ヴィスコンティ!MWあると」もトップと同一周回に付け、優勝に向けての意地を見せる。

3 位と 4 位は共に 47Lap で No.55「アビリティーガレージワークス」、No.192「DXLメビウスアルトワークス」と続く。

5 位の No.32「爆走あばれ馬レーシングミニカ」も 46Lap と表彰台圏内をキープする。



中盤

決勝の半分となる 2 時間が経過したところでの 1 位は、なおも No.14「ガレージイシヤマアルトバン」。総合でも 1 位となる 94Lap を周回する。

2 位も序盤から引き続き No.666「ヴィスコンティ!MWあると」がポジションをキープするが、93Lap と少し差を広げられる。

3 位は 91Lap で No.55「アビリティーガレージワークス」が続き、4 位には 90Lap で No.32「爆走あばれ馬レーシングミニカ」がポジションアップしてくる。

No.192「DXLメビウスアルトワークス」は 5 位に順位を落とすが周回数は 89 周とまだまだ表彰台圏内に付ける。



終盤

間も無く3時間を迎えようかというところで、No.192「DXLメビウスアルトワークス」は走行中にボンネットが開くアクシデントに見舞われる。このアクシデントでフロントガラスが破損し無念のリタイヤとなってしまう。

3時間が経過してもなお、ポールスタートの No.14「ガレージイシヤマアルトバン」が1位の座を守り続ける。周回数は130Lapに到達する。

2位には127LapでNo.55「アビリティーガレージワークス」が浮上してくるが、3位のNo.666「ヴィスコンティMWあると」も同一周回につけており、ラスト1時間での勝負となる。

また4位のNo.32「爆走あばれ馬レーシングミニカ」もわずか1周差の126Lapに付けているため、表彰台を懸け3チームでの争いとなった。



最終結果

トップでチェッカーを受けたのは、予選1番手スタートからトップを守りぬいた No.14「ガレージイシヤマアルトバン」で、169周を走りきった。40kgのハンディーウエイトをものともせず、開幕3連勝を飾った。

接戦の末、2位に入ったのは No.55「アビリティーガレージワークス」であった。164周をラップし、2戦連続での2位獲得となった。

3位には2位と同一の164Lapを走りきったNo.32「爆走あばれ馬レーシングミニカ」が入り、嬉しい初表彰台となった。

終始2番手争いをしていた No.666「ヴィスコンティMWあると」は、ピットタイムハンディーが重くのしかかり、163Lapの4位でチェッカーとなった。

新規格軽自動車が入ったことは、今後新規格車でエントリーを考えているチームにとって朗報であろう。

3戦を終えて自力優勝の可能性が残っているのは、No.14「ガレージイシヤマアルトバン」だけとなった。第4戦以降、No.14の独走に待ったをかけるチームは現れてくるのか。

